

「江戸の川を歩く」第九回原稿

櫻川

■ 1 櫻川の流れ

虎ノ門辺から愛宕下へ。

櫻川は、大割下水である。幅約一間余の溝川。大下水とは言え、江戸期では、清流で、ある意味では、庶民にとっては、江戸の街で、至る所で見られる、正に生活に馴染みの江戸の川であった。櫻川は、溜池から虎ノ門に達する、御堀の水と堀沿いに流れる小川が重なり合って、水源となっているようである。安政年間の地図だと、御堀の新シ橋辺りから、おそらく石樋を通して、愛宕下通りに入り、この通りの面に出ている。この川は、愛宕下通り沿いを南に下り、赤坂川の支流を加え、さらに南の愛宕下へと流れている。そして愛宕山台地の前を通り、青松寺前を抜け、増上寺に達する。それから、広大な増上寺の周囲を巡って、赤羽川（古川）に落ちる川だった。櫻川という名称は、武家屋敷が密集する以前、虎ノ門辺りから愛宕の辺まで、悉く田畑で桜

の木が沢山植わっており、そうした光景からついた名という。

愛宕下通りを流れる櫻川の光景は、広重の絵「愛宕下藪小路」によく描かれている。この絵は、愛宕下に向かって描かれており、絵の左は、土方備中守の上屋敷である。武家長屋が道沿いに建ち、雪降りしきる中、多くの人々が傘や箕を羽織って愛宕下に向かって歩いている。絵の右下に流れる川が櫻川である。櫻川にまたがって、辻番所があり、加藤越中守の上屋敷となる。雪が積もった竹藪が川を覆っているが、この辺り、竹藪が多く、加藤越中守の屋敷を、江戸っ子は、「藪加藤」と呼んでいた。赤坂に向かって藪小路があり、加藤屋敷に続いて武家屋敷が連なっている。武家屋敷とはいえ、鳥が飛び交い、櫻川の清流とともに、江戸の自然がリアルに描かれている。

■2 広重「愛宕下藪小路」絵の右下の清流が櫻川。

雪旦も江戸名所図会で「藪小路」と題して、

櫻川を描いている。中央左の竹藪が加藤屋敷で、その北角から藪小路が始まる。武家が子供の手を引き、奥方と家来が後に従い、櫻川の畔を歩いている図である。

■3 雪且…江戸名所図会「藪小路」武士、子供、奥方、家来が櫻川沿いを歩く。

愛宕下

この櫻川が愛宕下に入ると、滔々たる流れとなり、真福寺、円福寺、そして青松寺の門前を通っている。背後には、愛宕山、愛宕権現の階段が描かれ、なにしろ寺町なので、寺社が連なっており、各門の前には、橋が架かっており、真っ直ぐ流れる櫻川の、橋の行列といった光景である。通りを大名行列やら、籠、民衆が大勢、行き交っている。そして、愛宕権現の総門、櫻川に架かる橋、今も残る愛宕権現の男坂の階段が描かれる。

続いて、青松寺の広い境内、伽藍の前を櫻川が流れている。

■4 雪且…江戸名所図会 愛宕下、真福寺前を流れる櫻川。

■5 雪且…江戸名所図会 愛宕下、愛宕権現総門前を流れる櫻川。中央に男坂、

右側が女坂。

■6 雪旦…江戸名所図会 青松寺前を流れる櫻川。

増上寺から赤羽川へ

そして、櫻川は、増上寺に達し、江戸全盛期に約二十万坪といわれた、広大な増上寺領の北と東（海側）を小堀のように囲んで流れ、主流は、増上寺の表玄関、大門の前を通り、将監橋の処で、赤羽川（古川）へと注ぐのである。なお、寺領の北東の角で、分流が江戸湾に向かって流れており、宇田川と称されている。

赤坂川

櫻川が幅一間余の下水道にもかかわらず、水量が豊富なのは、愛宕下通りで赤坂川が流れ込んでいるためである。この川も、幅一間の下水道で、江戸期、陽光寺（新宿区信濃町）と若葉三丁目の境界。今はない。）を水源とし、鮫ヶ橋町を抜け、徳川紀伊（五十五万石）居屋敷北側（鮫河橋坂）から、中に入る（赤坂東宮御所、迎賓館）。屋敷内中央には、大き

な池があるが（今もある）、ここに直結。さらに、屋敷の外に出て、外濠、溜池沿いに赤坂田町を流れ、溜池の終点のところ、二つに分かれる。一つは、溜池に、もう一つの流れは、榎木坂の水番屋から汐見坂を下り、愛宕下通りの櫻川に注いでいる。

この川は、赤坂を通るから赤坂川と名付けているが、江戸の人々は、この川も櫻川と呼んでいたようである（特に溜池から愛宕下通りまでの流路）。

赤坂川は、部分的に、地中の石樋を流れ、地表に出るとは武家屋敷間を縫うように流れている。この小川も江戸庶民にとっては、正に、「江戸の川」で、人々は、風流な情緒を感じていたに相違ない。

これらの流れは、今や、形骸すら残しておらず、「百歩、歩けば川に当たる」の江戸の面影は、全くない。